

解答

- 一 問一 A イ B イ C ウ
 問二 ア
 問三 ア
 問四 ウ
 問五 ふだんはタブーである「殺し」の現場となることで、退屈な授業が非日常の、刺激的体験の場に変わること。
 問六 ① 目の前にある命が自分の命を支えてくれていることを勉強し、感謝の気持ちを持つためにユージンのニワトリを殺すのだとした点。
 ② ユージンの許可を得てからニワトリを教材にするとしながらも、母の言葉を出してクラスのムードに追い打ちをかけていった点。

- 問七 イ
 問八 ウ
 問九 エ
 問十 ① 創意 ② 預 ③ 唱 ④ 対処 ⑤ 景色

- 二 問一 ウ
 問二 イ
 問三 お互いののしりの言葉の相乗効果によって、本来意識していた以上に言葉がエスカレートしてしまうから。
 問四 エ
 問五 ウ

解説

- 一 出典は、梨木香歩「僕は、そして僕たちはどう生きるか」
 問一 A 「人後に落ちない」とは「他人にひけをとらない」という意味です。
 B 「二つ返事」とは「ためらうことなくすぐ承諾する」という意味です。
 C 「血の氣」が「血の通っている様子」なので「血の氣が引く」とは「青ざめる」ことです。
 問二 ユージンの「小さい頃、ニワトリを飼ってた」という言葉に対し、「僕も覚えてるよ」と返事をしたこの話題が「今までどこかで、見ないようにしていたもの、とりあえずカッコに括って横に置いていたもの」のことです。それは「ユージンのニワトリを見殺しにしてしまった」という事実に向き合おうとせず、避けていた」ということです。
 問三 「ユージンには絶対無理だ」とありますが、「何」を無理だと言っているのでしょうか？ それは「軍隊でも生き抜いていくこと」ですね。なぜユージンは生きていけないのかを考えると、僕のように「鈍さ」がない、つまり「せみ細」だからです。「ウ」のように「おく病」ではありません。
 問四 ユージンは、学校で飼っている動物の仲間にしてもらえたら毎日会えると思いきょこちゃんを学校に持っていったのに、杉原に「学校がもらうことになったんだな」と言われ、ニワトリは学校が自由にしているというようなその言い方に違和感を覚えたのです。
 問五 みんなが期待していたことは、4ページ2行目の「退屈な授業が、なんかとてつもなく刺激的なものに変わり、ふだんはタブーそのものの、『殺し』の場に居合わせられるっていう、非日常的な事態」を体験することなので、この部分を使って書けばいいのです。
 問六 ① 杉原先生の言い分のどこが理にかなっている（理屈に合う）のでしょうか。「言い分」なので杉原先生の会話に注目すると、3ページの『『今、そこにある命が、自分の命を支えてくれる、自分の血や肉になるという体験をしてもらいたいと思う。食べ物にも自然と感謝の気持ち湧いたんだ』』の部分、先生の立場の考えとしておかしくはないと感じています。② 杉原先生のどんな点が強引なのでしょう。先生は是が非でもニワトリを使いたいと考えています。3ページで「もし、優人が許してくれただけれど」と言いながらも、4ページ7行目で『さっき、優人のお母さんに連絡したら、そういうことならニワトリも本望でしようって言うてらしたぞ』と母親を話に出して、「クラスのムードに追い打ちをかけ」優人に無言の圧力をかけた点が強引だったのです。

問七 傍線部直後「コッコちゃんをブラキ氏だと思えば」分かることじゃないかと、僕は自分のことに置き換えて考えることで理解しています。何が分かったかというところろん「コッコちゃんを殺されるときは優人のつらい気持ち」ですね。6ページに「きみがどんなにコッコちゃんを可愛がっていたか、僕ほどよく知っていた者はいない」ともあります。

問八 傍線部から読み進めてみましょう。「とんでもないことに気づいたんだ。こんなこと、口にしていんだらうか。僕は大きく息を吸って吐いた。『僕はその時ずっと、声がかげられなかったんだ、君に。』ということは僕はやっぱり、気づいていたんだ。分かってたんだ、君の気持ちを」とあります。ここから、僕は優人のつらい気持ちに気づきながら、そのことから目を背けていたことに気づいたのです。

問九 「だからおまえは、愛すべきやつなのさ」とは、表面的にはほめているのですが、実際は僕の良くない性質を考える問題です。「コッコちゃんを失う優人のつらい気持ちかわかっていた。(問七) ↓その気持ちに気づいていたのにごまかしていた。(問八) ↓それに気づき悩み苦しんでいる。」というように、問七の流れから考えてみるのでしょうか。

二 出典は、近藤良平「からだと心の対話術」。

問一 「自分の存在を『出し』『引き』することによって、みんなのハイタッチ能力を引き出し」とは具体的にどうしているのか、傍線部直後の段落を読みましょう。「彼が相手よりも少し高いところに手を出すと、相手もその高さにまで上がる。手を出す時に朗らかに声を上げると、相手もつられて声が出る。それを繰り返していくうちに、ほとんど手を合わせる位置は高くなって」とあるように、自分の動きに相手が合わせるようになるのです。

問二 傍線部直後の段落を読みます。「彼は自分のからだに対して、ポジティブな思いを抱いていた。↓自分のからだはこれだからというたしかな思いが彼にはあった。↓そのポジティブな思いは、相手にも伝わり↓迷いのない力に乗せられ、知らず知らずのうちにハイタッチの位置は高くなるのです。これを傍線部では「調子に乗る」と表現しています。

問三 「本心ではなくても、醜い言葉を言ってしまう」のはなぜでしょうか。12ページに「相手がいるからこそ、お互いの動きや声を感じ取り、響かせ合い、影響しながら、その力は飛躍的に伸び、く相乗効果が生まれてさらに増大していく。このような効果は、く相手がいるすべての動きに当てはまり」とあります。悪口を言う場合でも、相手の言葉によって自分の返す言葉が強くなっていくのです。

問四 「心の声」とは「相手が話している時に、言葉と一緒に聞き、相手が何を感じているのかを考える」ものです。つまり、話している相手の様子を見ながら、相手の気持ちを感じることです。

問五 「からだでの会話」とはこの段落の最初にある「コミュニケーションをからだでやる」ことです。それは「ハイタッチ」の例にもあるように、「相手の動きに合わせて影響し合いながら行動する」ということです。